

展示風景



し、翌年、甲州財閥の
の助力を得て、富士見
後、同地は法政大学の
赤煉瓦塙で囲まれた広
所です。富士見町は、江
てから、陸軍関係や医学
大震災で大きな被害を受
三)、第四校舎(1928年)、

拡張する東京

大学昇格の背景には第一次大戦以降の好景気がありました。企業の大規模化
が進捗し、東京を中心とした都市には、「ホワイトカラー」、「サラリーマン」が層
生し、実業界では、大学などの高等教育機関において、知的なトレーニングを積
んだ優秀な人材が求められていました。
また、彼らホワイトカラーは公務員などとともに「新中間層」(自営業・商店主
だった旧中間層と対比される階層)と呼ばれ、そうした新中間層は自らの子弟
いでも高等教育を受けることを望んでいたため、潜在的な大学入
学者も見込まれたのです。
には、こうした新中間層の拡大は、彼らが層起りする場所としての「郊外」
都市)の形成にもつながっていきました。とりわけ、関東大震災以降の「幸
の過程では、鉄道網・交通網が拡張され、都市としての「東京」の範囲が
広がります。



ミニ展示 松室致の大礼服の修復

1920年の大学昇格にあたり、資金集めの富士見校
地の開発、教職員体制や組織の整備など、法政大学
の基礎を構築することに大きく尽力したのが法政大学
の初代学長である松室致です。松室は、司法大臣を二
度務める一方で、法政大学の学長を1913年6月から
1931年2月まで務めました。
HOSEIミュージアムでは、松
室に関する資料を所蔵してい
ますが、そのひとつが大礼服で
す。大礼服は太政官布告によ
り1872年に制定され、主に宮中
年に廃止されるまで、主に宮中
の公式儀式などで着用する最
上位の礼服でした。松室が、大
礼服を着用している姿は写真
も残されています。



大礼服を着た松室致

ミニ展示 松室致の大礼服の修復

松室の大礼服は、HOSEIミュージアムに収蔵されて
以降、特別展示などで、度々展示されてきました。しか
し、その細部を見ると、刺繍のぼつやシワの跡が
剥落、生地が割けが生じていたため、2024年1月~3
月に染織品の保存修復士による修復を行いました。
今回の展示が、修復後の大礼服のはじめての展示と
なります。元来の美しさを取り戻した大礼服、ぜひ細部
までご覧ください。



修復前・修復後 (朝山孝典撮影)